

月亡らさずの

徒桎けんしん

Story by Tadanu Kenshin

Illustration 魔太郎

本編抜粋試し読み

\* 稲羽白編 \*

フ  
オ  
ー  
ク  
ロ  
ア

St.1

月のない夜、  
あるいは  
悩めるうさぎ。

「おきつて……朔……おきつて」

白しろの声が出た。

朔は眠たさと戦いながら薄く目を開けてみた。白が首をかしげながら見下ろしていた。

遮光カーテンの隙間すきまから光が漏もれている。昨日は疲れで日付が変わる前には寝たはずだ。それでもまだまだ眠かった。

「もう少し寝る」

朔はそれだけ言って二度寝に入る。

勝手に部屋に入るなと言わなければならないが、普段遅刻しないのは白のおかげが大きい。入るなとは言えない。

「朝だよ？」

「夏休みだし。俺おれは寝る」

そう宣言する。

「ふむ。なるほど」

なにがなるほどなのかわからないが、納得してくれたようだ。

しばらくして白の足音が聞こえた。部屋から出て行ったのだろう。諦あきらめてくれてよかった。

月神つきがみは夜の支配者だ。だから朔は夜行性なのだ。学校に通うために無理に夜眠り朝起きる生活をしているが、それは朔にとって不自然なこと。

朝なかなか起きられなくても仕方がないし、夏休みと

もなれば昼夜逆転しても当然だ。

はくめいはくぼせい薄明薄暮性のうさぎとは違うのだ。

朔は幸せな二度寝に入った。

どれくらい時間が経たただろうか。朔には二度寝してからまだ五分ぐらいしか寝ていないような気さえした。

まだ眠り足りない。だが起きてしまった。

ほお頬にふさふさした何かが当たっていた。胸の上にも何か乗っている。重くて、それでいてフカフカと柔らかかく、そして人肌にあたたかい何かだ。

きつと、社やしろにたくさんいるうさぎが乗っかっているに違いない。うさぎが寝ている朔の上に乗っかってくるこ

とは、冬にはよくある。

冬なら心地よかろうが、今は夏。正直暑い。朔はうさぎをどうにかするため目を開けた。

頬を撫なでる大きくしろいうさぎの垂れ耳が目に入る。乗っかっていたのは白だった。うさぎにしてはやけに大きく重かったわけだ。

一度、起こしに来たときは普段着だったが、今は寝間着だ。わざわざ着替えに戻ったのだろう。変なところで律儀だ。

白は朔に抱き付いて眠っている。朔の腹あたりに自分の胸を押し付け、まるで心臓の音でも聞くかのように、胸に頬を当てていた。



朔は健康な男子高校生だ。朝はやばい。ただでさえ体の一部分が大きく硬くなっているのだ。

可愛い白かわいに抱き付かれて、けして小さくない柔らかい胸を押し付けられて平然としていられるわけがない。

暑いけどもう少しこうしていたいという欲望がゆっくりと首をもたげてくる。それを何とか理性で追い払い、「白、白」

そう呼びかけながら肩をゆらす。

「うーん」

白は寝返りをうった。

その瞬間、寝間着の胸元むなもとから谷間あらがが見える。その柔らかそうなしろく豊かな双丘は抗あらがいがたい魅力を持って朔

を引き付ける。

「うっぐぐぐ。ぐううう」

右手が白の胸元に向かって伸びていくのを、かろうじてこらえる。

朔は深呼吸を一度して、再び肩をゆらした。

「白、白！」

白がゆっくりと目を開ける。

「……なあに？」

「そろそろ起きないと」

「夏休みだから、起きなくてもいい。そう言ったのは朔」  
そう言って、また目をつぶった。

「ほ、ほら。朝ごはんとか食べないとだし」



「うーん」

白はゆっくりと体を起こした。

「朔はわがまま」

そうつぶやいて大きなあくびを一つした。

「どうして、俺の布団ふとんで寝てるの？」

「私の布団は干したから」

「そ、そうなんだ。でも、あれかもしれない。あまりベツドに入ってこない方がいいかもしれない」

「なんで？ 昔はよく一緒に寝てた」

「昔って、それは子供の頃ころでしょ。いまはいろいろ大きくなっただしさ」

特に胸が。

「ベッドはまだ十分広い」

「いや、そういうことじゃなくて。えっど何と言えばいいか」

性的興奮を抑えきれないのでやめてくださーとは言いにくい。

しどろもどろになつた朔を見て白は立ち上がる。

「朝ごはん」

白はそう言って歩き出した。

部屋から出る間際、  
「意気地なし」

白がそう小さくつぶやいたのが、朔の耳にはっきりと聞こえた。

バトルあり、可愛さあり、切なさありの

本編もよろしくお願いします。



●月とうさぎのフォークロア。

St.1 月のない夜、あるいは悩めるうさぎ。

●著：徒塾けんしん ●イラスト：魔太郎

●本体価格 600 円 (税込 648 円)

●2016年12月15日発売